シリーズ
《北海道のポーランド人から》

誓います／Przysięgam

～日本とポーランドの結婚式について～（1）

アグニェシュカ・ポヒワ

Agnieszka Pochyła

1983 年ポーランド・シロンスク県ヤストシェンビェ・ズドルイ(Jastrzębie-Zdrój) 生まれ。ポズナニ大学新言語学部卒（日本学修士）。日本政府奨学金を受け北海道大学に2回留学した。現在フリーカメラマンとして活動中。

9 月 15 日に結婚 1 年記念日を迎えました。結婚式の準備とその当日の思い出がまだフレッシュである一方、一年という間をおくと少し客観的に考えることができるようになった気もします。それがきっかけで、今回日本とポーランドにおける結婚式をさまざまな面から比べてみようと思いました。

長年日本に住んでいる私ですが、日本人の相手と結婚することになったので、やはり結婚式をあげるとしたら日本であげるのではと、予想していました。結婚式は、日本とポーランドという二つの違う世界がぶつかるテンションの高いイベントですから、どのように私たち二人の個性と私たちが代表する国の個性を上手に表せるのかが最大の問題とチャレンジとなりました。

そもそも日本とポーランドでは結婚はどのようにできるのか？結婚の準備はどこがポイントなのか？結婚式の当日の流れはどう違うのか？また両国の伝統的な結婚式は現在どう変わっているのか？という質問に答えてみたいと思います。

日本とポーランドにおける婚姻の違い

まずは、両国の法律から見た、婚姻が成立する場合を簡単にまとめましょう。

日本では役所で事前に記入した婚姻届を提出することで法律上、夫婦が認められます。好きな時に記入し、一人でも好きな時に提出できるという非常に便利で簡単な（外国人の場合を除いて）手続きですが、その一方、重要度の割には、ただ紙を渡して済むという、思い出にもならない、感情のこもっていない手続きでもあるという意見を外国人からよく聞くことがあります。

ではポーランドの場合はどうでしょうか？

日本より手続きが複雑ですが、次のようにお祝いすることになります。書類を渡すだけでは結婚はできず、シヴィル・ウェディングという式が必要となります。これは簡単に言うと、宗教的な要素を抜いた結婚式です。普通は市役所に付属する登記所の結婚会場で行われます。家族と友達が集まり、新郎新婦が役員の前で誓いの言葉を交わし、証人と一緒に書類にサインをし、最後に役員が結婚を認めます。

以前は役所で小規模なシヴィル・ウェディングを済ませ、教会で立派なウェディングを行うというパターンが一般だったのですが、1998 年から法律の改正によりコンコルダート・ウェディングという混合結婚式が可能になりました。教会の挙式が始まる直前に、役所からもらった書類に新郎新婦、その証人と神父がサインします。法律上も宗教上も結婚が認められ、さらに一回で済ませるので、今はコンコルダート・ウェディングが広く行われています。

また、最近では無宗教、経済上の理由などでシヴィル・ウェディングのみを選ぶカップルが増えてきています。

（つづく）

《北海道のポーランド人から》

誓います／Przysięgam

～日本とポーランドの結婚式について～（2）

アグニェシュカ・ポヒワ

前回は日本とポーランドの法律上で見た婚姻の成立の相違についてお話ししました。今回は両国の結婚式、つまり法律と関係のない儀式の種類を比べてみましょう。

日本の結婚式を見ると神前式、キリスト教式、人前式という3つの種類の式が一般的に行われていますが、神前式は日本の宗教と伝統から由来し、キリスト教式はカトリック・プロテスタントの宗教と、それに伴う西洋（主にアメリカ合衆国）の伝統が由来です。一方、人前式は宗教の要素を抜いたキリスト教式に似ており、自由自在のスタイルで行われています。式を挙げる場所も様々で、神社、レストラン、ホテル、教会風結婚式場などがあります。

面白いことに、日本では神前式とキリスト教式を希望するカップルはその宗教の信者でなければならないという条件は全く存在しません。なぜかというと、現在の日本社会では一般的に、どの宗教・宗派を信仰しているかはそれほど重視されず、また個々人も自らの信仰を殊更に意識することが少ないためです。一つの宗教を信じるより、人生の中のイベントや年中行事によって宗教を選ぶという日本独特の考え方があり、結婚式も宗教的な儀式というより、風習・伝統に当たるものになっています。以上から見ると、たとえキリスト教式を選んだとしても、本物の教会で本物の神父・牧師がいる本物の儀式ではなくても、誰も（信者を除いて）気にならないのです。

最後に人前式に触れると、神父・牧師のいないキリスト教式風に行われる場合がほとんどですが、特定宗教とは無関係であるため、ほかの宗教または伝統から好きなアイデアをいいとこ取りして、挙式を独創的にカスタマイズできます。日本のように結婚式のスタイルを好きに選べる国はほかにあるのだろうかと、たまに不思議に思います。

では、ポーランドの結婚式には、どんなものがあるのでしょうか？

残念ながら、日本ほどバライエティはないのです。ポーランドの国民の約 95%がカトリック教徒で、そのうち 75%が敬虔な信者であるため、ポーランド人の価値観や日常生活にはカトリックの信仰が根付いています。結婚式も一般的に教会で行われるカトリック式がほとんどで、進行は決まっており、自由にスタイルを選ぶことはあまりできません。さらに結婚の準備としてさまざまな手続きと宗教的な儀式を済ませなければならないので、日本の教会結婚式とポーランドの教会結婚式とは、表面は似ていても裏はまったく別のもので、日本の「偽神父」と「偽教会」を強く批判する人も珍しくありません。

無宗教、また教会の挙式を望まないカップルは、役所でシヴィル・ウェディングをあげるのが一般的です。人前式というコンセプトはいまだにあまり知られていないようです。かならず役員の前または神父の前で結婚を誓うことになります。

以上、日本とポーランドの結婚式の挙式の種類をまとめてみました。

次回は、両国の実際の式の流れに移る前に、結婚式のための準備について紹介したいと思います。

（つづく）

Agnieszka Pochyła

1983 年ポーランド・シロンスク県ヤストシェンビェ・ズドルイ（Jastrzębie-Zdrój）生まれ。ポズナニ大学新言語学部卒（日本学修士）。日本政府奨学金を受け北海道大学に2回留学した。現在フリーカメラマンとして活動中。

《北海道のポーランド人から》

誓います / Przysięgam

～日本とポーランドの結婚式について～（3）

アグニェシュカ・ポヒワ

前回は、主に宗教がポーランドと日本の結婚式にどのように影響したか、また式の種類についてお話ししました。次は、両国での結婚式へ至るまでについて具体的に比べてみたいと思います。会場探し、衣装選び、カメラマン探し等々はどのように違うのでしょうか。

式の日取りとゲスト

まず、結婚式の日取りの決め方からスタートしましょう。両国とも一般的に結婚式が一番多い曜日は土曜日で季節は夏です。日本もポーランドも、会場の人気によって数ヵ月から1年という待ち期間があるので、日付決定は会場探しと同時に行います。

日本の場合は、日取りを決めるときに六曜カレンダーが重要になります。仏滅は絶対に避け、なるべく大安や友引の日に式を挙げるという風習があるからです。新郎新婦本人は暦をまったく気にしなくても、その両親や親戚に強く信じる人がいる場合は、日付選びが難しくなります。

ポーランドには、名前に“r”が入っていない月（例：maj＝5月）に結婚しないほうがいいという面白い迷信がありますが、現代社会ではそれを守る人はいないようです。日取りは本人たちと（ある程度）ゲストの都合に合わせて選びます。

ゲストといえば、日本では、親戚と友人に加えて職場の同僚と上司を招待することが多いですが、ポーランドではそれは考えられません。結婚というのはプライベートなイベントで、仕事とは無関係だからです。また、ポーランドでは、新郎と新婦がそれぞれ一人の証人を選ぶのが常識です。兄弟または親友にお願いするのが一般的ですが、証人の仕事は正式書類に署名するだけではなく、結婚準備を手伝い、余興を考え、結婚当日まで二人の総合付き添い役を務める大切な助っ人です。

ウェディングの準備――プラン vs.口コミ

日取りとゲストを決めてからの準備は、ポーランドと日本では進め方がだいぶ違っていきます。両国の結婚準備の特徴を一言でいうと、日本は「プラン」、ポーランドは「口コミ」というようにまとめることができます。

前回お話ししたとおり、日本ではホテルウェディングがもっとも一般的です。気になるホテルがあれば、そこのウェディング担当に相談していくつかのウエディングプランを紹介してもらいます。基本プランには会場、装飾、食事だけではなく、衣装、写真・動画撮影、エンターテイメントなどが含まれており、すべてがパッケージになっています。さらに自分の予算に応じて衣装や食事をもっと豪華にする、余興を増やすというアップグレードや追加オプションも付けられます。チャペルと披露宴会場から衣装スタジオ、写真スタジオまで、必要なサービスのほぼすべてが一ヵ所に備えられているため、ウェディングの計画は効率的に立てることができます。

その反面、自分らしく結婚式を組み立てることはほぼ不可能で、自分のイメージしたウェディングを仕方なくプランに合わせる必要があるのは大きな減点になります。ほとんどのホテルは、そこと契約を組んでいるサービス会社を利用させているため、例えば自分で買ったお気に入りのドレスを着る、知り合いのカメラマンに撮影をお願いするなど、自由な行動は制限されてしまいます。それが許されている会場を見つけたとしても持込み料を払うことを要求される場合が多いです。

ところが、ポーランドでは式は教会ですが、パーティーはホテルというより、レストランまたは部屋付き多目的式場を使うことが多いです。会場予約と一緒に食事プランと装飾プランを決められるが、それ以外の物をすべて自分で探して決める必要があります。そこで口コミが重要になってきます。会場担当に聞けば、おすすめの花屋やバス会社、最近結婚した友達に聞けば、おすすめの美容サロンを教えてくれます。つまり、周りの人に聞く、またはインターネットで検索するのが主流です。そのプラス面とマイナス面については次回もっと詳しくご紹介します。

（Agnieszka Pochyła）

ポーリッシュ・ポタリーショップ 2016

クリスマス市で賑わうテレビ塔の真下、札幌で写真家として活躍されているアグニェシュカ・ポヒワ（アガ）さんが出店されている、ボレスワヴィエツ陶器の並ぶポーリッシュ・ポタリーショップにはたくさんの人が足を留めていた。日本の食器には考えられないほど、なぜこんなにもカラフルなのでしょうかと尋ねると、アガさんは「遊び心です」と一言。

ではあまり実用的ではないのかと思うと、電子レンジ、オーブン、冷凍なんでも OK と、いろいろ説明を聞くうちにイマジネーションが膨らんで、私もビールジョッキは止めにして、かわいい蓋つきのバターケースを購入、お惣菜などを入れてチンして今晩からお酒の時間の楽しみが増えました。

いつもは素通りの冬の大通り公園…澄み切った空気感と眩しいイルミネーション…私たちはなんと美しい街に住んでいるのだろう…そしてポーリッシュ・ポタリーショップ…白一色の札幌の街に求められる艶やかさがここにはある。　（写真と文 松山敏）

誓います/ Przysięgam～日本とポーランドの結婚式について（4）

アグニェシュカ・ポヒワ Agnieszka Pochyła

皆さま、あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。ウエディングシリーズの続きです。今回は衣装についてお話ししたいと思います。

ポーランドでは、基本的には新郎はスーツ、新婦はドレスを着ます。スーツは黒系でシンプルな物で燕尾服はめったに見かけません。新郎の仕事が警察官、軍人、消防士などなら、制服を当日の晴れ着として着ることがあります。フォークロアが盛んな地域では、民族衣装を着る新郎新婦もいます。

ウェディングドレスは白で、近年はすらっとシンプルかつエレガントな物が主流。長さは自由ですが、やはり長いドレスが多いようです。ただ、ダンスもできるように引きずらないスカート丈がポイント。ヴェールはあっても髪飾り扱いのようなもので、顔を隠す（ヴェールダウン）ためではありません。

ポーランドの結婚パーティーは長いと夜中、たまに朝まで続くことが多いですが、お色直しという定番イベントはありません。最初から最後まで同じ服で過ごす花嫁もいれば、日付が変われば好きなタイミングでパーティードレスに着替える花嫁もいます。ただ、日本のカラードレスのようなものではなく、踊りやすい、短めの（膝丈が多い）シンプルなドレスを着ます。新郎のお色直しは暑くなったらジャケットを脱ぐぐらいですね（笑）。

昔はドレスもスーツも買って、数年間ワードローブの中で眠ったドレスを売るか捨てるかが当たり前でしたが、近年は、ドレスはレンタルサロンで借りることが多くなってきました。ネット販売で中古の物を買うという選択肢もありますが、その場合は必ず実物を見て試着するのが常識です。新郎のスーツは未だに自分の物を買うのがほとんど。様々なイベントに使いまわしできるからです。

日本の場合、ドレスがどんどん主流になってきましたが、和装という選択肢もあります。ここで同じ日に様々なスタイルを組み合わせることを可能にするのが、お色直しの役目。和装からドレス、または白いドレスからカラードレスに着替え、自分もゲストも楽しませる演出です。ポーランドではめったに見かけませんが、日本ではふわふわの、お姫様ドレスが人気です。特にお色直し用のカラードレスはディズニーのプリンセスを思わせるような豪華な物が多いですね。ただ自由に動くことが非常に難しく介添えのお手伝いが必須になります。

日本では花嫁だけではなく新郎の衣装にも力を入れています。燕尾服が主流で、色は黒以外もよく見られます。白色・灰色から派手な柄の入ったお色直し用の面白いものまで選択肢はポーランドの花婿より豊富です。

結婚衣装はホテルに入っている衣装サロン、またはそれぞれの会場を担当する衣装屋からレンタルできます。新郎新婦の衣装はもちろん、和服なら二人の両親の服装まで借りることがあります。靴や小物もすべて同じお店でセットとしてレンタルできるので効率的ですね。もちろん衣装プランもそれな

りに高くなります。ポーランドではドレスだけ借りて、小物をネットかお店で買い揃えることが多いです。面倒でも、友達と一緒に行けば楽しくショッピングできるし、買った小物を記念として長く楽しめます。

まとめると、衣装探しに関してはポーランドのほうがレッグワークを要するが安く上がり、衣装も長時間着るので日本のドレスと比べると動きやすくて疲れません。人生に一回だけでもお姫様気分になりたいのなら日本のドレスの魅力がわかります。価格の安さを求めることはできませんが、一カ所で効率的に衣装を揃えられるのは楽ですね。

NHK《ラジオ深夜便》より

イギリス文学に貢献したポーランド人 コンラッド

岡崎 恒夫

皆さんはジョーゼフ・コンラッドという作家をご存じでしょうか。文学事典では英国の作家として紹介されています。特に海洋文学を得意とし、英文学史の中でもその分野では傑出した作家です。

彼の『闇の奥』(1899)という作品に注目したフランシス・コッポラ監督が映画化して世界的な評判を得た『地獄の黙示録』(1979)という映画をご覧になった方も多いでしょう。極度の孤独と寂寥はいかに人間性を荒廃させるかという主題の権化を見事に演じたマーロン・ブランドを覚えていらっしゃる方もあると思います。映画の舞台はベトナムになっていますが、本ではコンゴでの出来事です。

今日はその作家ジョーゼフ・コンラッド(1857–1924)をご紹介します。彼は正にポーランド生まれのポーランド人で、最後までポーランド人であることに誇りを持ち、遺言で、カンタベリー墓地にある墓碑にはポーランド名がポーランド語で記されています。本名はテオドル・ユゼフ・コンラット・コジェニョフスキ、外国人に妙な発音で呼ばれないために苗字以外の名前を二つとって英国名としたのです。

ではどうしてポーランド人のコンラッドが英語で書いた文学が、英国人がこれ以上に豊かな表現を持つ英語はないと言い切り、英語(いわば国語)の教科書にもっとも重要な模範英語として採り入れられているのでしょうか。その謎を解くには彼の生い立ちから見ていくほかありません。

コンラッドは 1857 年(日本ではペリー提督来航の頃)にポーランドの没落した貴族(シュラフタ)の息子として生まれました。父親はロシア占領下でポーランド独立運動に参加し息子が 5 歳のときに流刑になり、一家も父親を追って北ロシア・ヴォログダに移住しました。そこで母親が結核で亡くなり、4 年後に父親も死亡したため、彼はクラクフのおじさんに引き取られました。

寂しさを紛らわせるため、文学研究者だった父親の残した蔵書を片っ端から読破したコンラッド少年は海洋文学に目覚め、海にあこがれて 1873 年 16 歳で故国を脱出しフランス船の船員になりました。

5 年間フランス船で世界中を航海したあと、1878 年(日本の西南戦争のころ)イギリス船に移り、船員との会話で初めて英語を学んだのです。その間世界各地を航海して見たり体験したりしたことが、後の彼の作品の素地となりました。没落したとはいえ当時のポーランド貴族の間ではフランス語、ドイツ語が公に使われ、北ロシアではロシア語を習得したことが彼の文学に幅広さと深さを植えつけました。

こうして大人になってから英語を学び、38 歳(1895)でやっと作家デビューを果たしたのです。すでに数ヶ国語をものにしていたコンラッドは、よほど英語が性に合ったらしく「もし英語で書いていなかったら、私は何も書いていなかっただろう」と言っています。英国船上で、後のノーベル賞作家ジョン・ゴールズワージー(1867–1933)や、『宝島』(1883)の作者ルイス・スティーヴンソン(1850–94)と知り合い、彼らとの付き合いは生涯続きました。

コンラッドゆかりの場所としては、ワルシャワの目抜き通り Nowy Świat 47 に旧居が残っています(写真上、この建物のオーナーはショパンの妹で、ショパンの父親がここで亡くなりました)。またザコパネには彼が晩年滞在したヴィッラ・コンスタンティヌスが残っています(写真下)。

(おかざき つねお)

photo 上 Mateusz Opasiński
下 Maciej Szczepańczyk